

無量壽

平成15年1月1日
浄土真宗 本願寺派
林徳寺 発行
025 - 276 - 3456

浄土真宗の教章

一、宗名 浄土真宗本願寺派（本山 西本願寺）

二、宗祖 見真大師 親鸞聖人

一、本尊 阿弥陀如来（南無阿弥陀仏）

一、經典 浄土三部経 仏説無量寿経（大経）
仏説観無量寿経（観経）
仏説阿弥陀経（小経）

一、教義 南無阿弥陀仏のみ教えを信じ、必ず仏になら

せていただく身の幸せを喜び、常に報恩のお
もいから世のため人のために生きる。

一、宗風 宗門は同信の喜びに結ばれた人々の同朋教

団であつて、信者は常に言行をつつしみ、人道
世法を守り、力を合わせて、広く世の中にま
ことのみ法を広めるように努める。また、深
く因果の道理をわきまえて、現世祈禱やまじ
ないを行わず、占いなどの迷信にたよらない。

浄土真宗物語①

林徳寺は、**浄土真宗本願寺派**の寺院です。こ
れについて、上に「浄土真宗の教章」を示し
ました。私たちの宗派がどのようなものである
かを知っていただくにはもつとも適切なもの
です。これからしばらく、浄土真宗についての
説明を続けていきたいと思います。



浄土真宗の宗祖**親鸞聖人**は、平安時代の末
期、承安三（一一七三）年、京都市郊外の日野
に生まれました。

現在この誕生の地
には「**日野誕生院**」
が建立されていま
す。

親鸞聖人は九才
で出家し、その後
二十年間比叡山で
修学に励みまし
た

が、その修行では「さとり」を得ることができ
ませんでした。そのため二十九才で比叡山を下



日野誕生院本堂（京都市伏見区日野）

り、京都吉水において浄土宗を開き、念仏の教
えを広めていた**法然上人**に弟子入りをしまし
た。親鸞聖人は法然上人の弟子としては遅い入
門でしたが、熱心に阿弥陀如来の教えについて
学びました。しかしこの法然上人の念仏の教団
は、当時の他の教団や朝廷から批判をされるこ
ととなりました。

そしてついに

建永二（一一〇七）
年、念仏禁止令が
出され、法然上人
をはじめ多くの弟



親鸞聖人上陸の地(居多ヶ浜)

子が各地へ流され
ることになりました。法然上人は藤井元彦とい
う俗名で土佐へ、**親鸞聖人は藤井善信の俗名で**
この最後の国府（現在の上越市直江津）に流さ
れました。これはまた親鸞聖人がそれだけ重要
なお弟子の一人となつておられたことを表すも
のともいえます。また俗名を与えられたのは、
当時は出家を罰することができなかつたからで
す。この時親鸞聖人は三十五才でした。

浄土真宗の作法・心得(シリーズ①)

焼香の作法

① 線香

「香」は香りをもって仏前を莊嚴する大切な作法です。そこで火を点じたらよい香りのする(したがって高価な)「香」を用いるのが本来で

す。お葬式などの際に「香典」を持参しますが、これは本来お参りのために持参すべき「香」の代わりに、お金を持つていくようになったことから始まっています。このことから、本来「香」というものがかなり高価なものであることがわかります。事実、白檀・沈香・伽羅などの「香」になると、ひとつまみが何万円にもなることがあります。

しかしせっかくな高価な「香」を用いても香りが短時間で去ってしまうため、長時間これを持たせるために江戸時代に考案されたのが「線香」



伽羅の線香 (1箱40本で2万円もします)です。よって線香も、値段はともかくよい香りのするものを

選んで用いたいものです。ちなみに浄土真宗では、線香を香炉に立てることはしません。必ず、香炉に入りやすいように短く折った線香を、横に寝かせます。

② 焼香

浄土真宗本願寺派の焼香には次のような作法があります。なお焼香の前に鈴は打ちません。

一、焼香卓(台)の前まで出て行き、二、三歩前で止まる。

二、本尊に向かって軽く礼をする。この時合掌礼拝はしない。

三、左足より前に進み、正座し(または立ったまま)、右手で香盆(香を入れる容器)

の中の香をつまんで香炉へくべる動作を一回だけ行う。

この時香をつかんだ手を頭上にいただくことはしない。

四、その後合掌し、そのまま声を出して念仏(南無阿弥陀仏を約一呼吸半称える)し、礼拝する。

五、立って(またはそのまま)右足より二、三歩後ろに下がり、本尊に向かって軽く礼をし、退出する。



日本語になった仏教の言葉 ④

《ありがたい》

日本語の「ありがたい」という言葉は、漢字では「難有」と書かれてきた。これは「有ること難き、極めてまれなること」を表す經典の言葉から出ている。

ありがたい尊いみ教えに養われている真宗教徒は、常にありがたい感謝の生活に生かされる念仏の行者である。

あさまし あさまし

よるひるなしの

あさまし あさまし

ありがたい ありがたい

よるひるなしの

ありがたい ありがたい

なむあみだぶつ

なむあみだぶつ

(妙好人 浅原才市の歌)

『私たちの言葉』経谷芳隆より